



登場人物紹介



クロマオー「うーん。うーん。この夢は2回目だ。僕はクロマオー。魔界の王子だったけど、人間との一騎打ちに父が負け、今は奴隷の身だ。最近は、」



「ネイちゃんと仲良くなり、周りがにわかに騒がしくなったよ。ネイちゃんは人間だけど、僕の仲間なんだ。」

「シロバンチョー（シロさん）という男の人とちょっと話す機会があり、僕たちは気に入られたようだよ。これからも会いたいみたいだ。ネイちゃんはイマイチ好きじゃないみたいだけど、良いヤツだと思うよ。もっともネイちゃんが好きだったらタダじゃおかないけどね！」

「父であるフォーはどこかできっと元気にしてると信じてます。」

「死んだデフォルトコマネチ（デフォ）のことを思って、毎日祈りを捧げているよ。でも不思議なんだ、どこかで生きている気がする。そう思うと寂しくないよ。」

「ベルはラタームのお腹の中。ラタームはいつかとっちめてやりたい邪悪だ！」

「ムニャムニャ.....光が差し込んでくる。誰かが、カーテンを引いたらしい。今日も1日がんばるぞムニャムニャ...！」

「「起きろ！！！！」」

そうだ、おテラへ行こう

ネイの申し出に工場長がノーと言うことはない。基本的には、彼女の言うことをやらせてくれる。

それが社会的に間違っていることなら別だが、工場長は大抵どんな注文もつけなかった。しかもそれが、放置された感じではなく、協力を惜しまない感じでさえあった。ネイに先日聞いた話を思い出すと、二人の親子関係の始まりは、普通とは異なる。生まれに悩むことはあっても、ネイは現状には悩んでいる様子はない。幸せの姿は見えないものだから。

さて、そんなネイが今回、工場長にした言い訳は、
「クロマオーをマゾクリキ車にする。」
「クロマオーは体が大きいから私くらい抱えるのはわけない。」



そうしてこの街一番の階段に上っている。

ネイ「クロマオー、頑張っ。もう少しで、四分の一くらいかな。頑張れ！」

外出の許可が下りたのは喜ばしいことだが、こんな苦行みたいなことに付き合わされるとは思ってもみなかった。

上を見ても先が見えない位の高さまで登ると言う。

クロマオー「ネイちゃん、本当に今日登らないといけないものなの？」

ネイ「そうなの私、今日で十四だから。十四になったら、参拝しなければいけないの。」

クロマオー「いけないの、って怒られるの？」

ネイ「挨拶が無いなんて、仏様も神様も一斉に怒りだすよ。芸能界から干される、状態！」

クロマオー「干物になっちゃう！それはしないといけない！」

クロマオーは本当言うと、今日を楽しみにしていた。

誕生日だから一緒に行って欲しい所があるとされていて、期待していた。

それが、この苦行だ。

本当言うと、残念で一步も足なんて出ない。でもネイはぐんぐん先をいく。

ネイ「ヒトはね、マゾクと比べて弱いから、神仏を信じることで力に変えるの。一致団結する時やここ一番の気合いを入れる時、こうして参拝するんだよ。マゾクを倒した勇者もここでお参りしてから、マゾクと戦ったんだ。」

クロマオー「戦う前にこんな苦労しないでも良いと思うけど。」

ネイ「仕方ないね。この国は高い所には偉い人が住むものだから。神仏は一等高い所にいるのよ。でも勇者は、マゾクを倒したあとに、高い所には住まなかった。今までと同じ、生家に住んでるんだわ。それがあの方の不思議な所で、みんなが好きな所なの。もっともクロマオーは憎んでいるかもしれないけれど。」

クロマオー「別に憎んではいないよ。もう過ぎたことだ。」

ネイは気遣わしげに窺い見た。

ネイ「四分の一だ！」

確かにそこには「四分の一、まだまだ頑張れ」と書いたたていしがあった。

要所要所にそれがあると聞いてきたらしいが、上るの自体はネイも初めてだそう。

汗をふき、すこしの休憩をとる。ネイが用意してくれた水筒から、黒豆茶が喉にしみる。

周りには誰もおらず、二人だけだった。

クロマオーは言っておかなければならないと思っていたことを伝えることにした。

クロマオー「ネイちゃんがこの前たくさん話してくれたから言うけど。」

ネイ「なあに？」

クロマオー「僕、魔界の王子だったんだよね。だから勇者に負けたフォーは僕の父なんだ。」

ネイ「うん。」

クロマオー「びっくりしただろうけど、僕はネイちゃんを騙したり、いじめたりしないよ。」

ネイ「びっくりしないよ。だってクロマオー、お父さんにそっくりなもの。私もあの一騎打ち見ていたから、よく知っているわ。」

そっくり？

クロマオーは迷路に迷ったように、不思議になった。
自分では意識したことがなかったが、父に自分は似ているのか。
それが驚きとともに、
しみじみとした感動になってクロマオーの胸を揺さぶった。

ゆびさき小道

そこから急な階段を十段ほど上ると、あやしげな小道があった。

誘い込むような立て看板には

「パンケーキ」

「ねこ」

「ビーズ」

「ハンカチーフ」

と、それぞれの気になるワードが一本一本両脇に刺さり、道の奥まで続いている。

気になるようで、ネイは覗き込んだ。

ネイ「クロマオー、先にお店があるのかな？」

クロマオー「たぶん。でも随分統一性のないお店だね。」

二人なら怖くない。

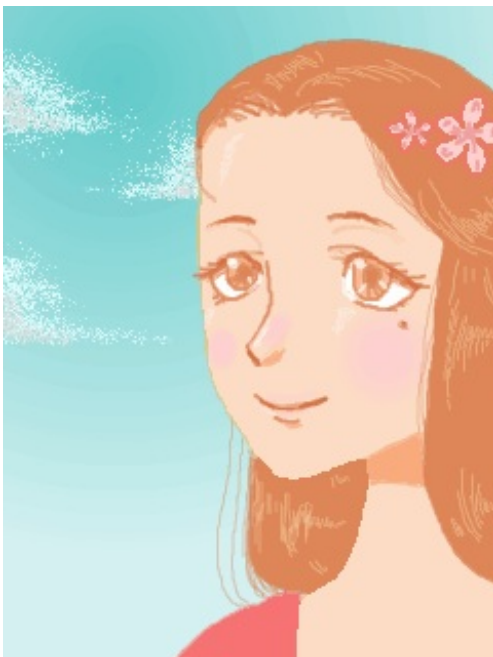
それにパンケーキも食べてみたい。

二人はその小道に入って行った。

茂っていて少し道がくねっていた為見えなかったが、さほど歩かずお店に着いた。綺麗な赤い屋根の、少女の字のような看板のお店。その名は「グルッテラトリスク」

扉を開ければ、店主らしき美人が迎えてくれた。

店主「ようこそ、グルッテラトリスクへ。問題の答えは見つかった？」



そんなこと突然言われても、だ。

ネイはクロマオーの足を思い切り踏んだ。

好かれない一心で「見つかりそうです！」とすぐ答えたから。

クロマオー「すみません、まず問題が出されていないのですが。」

店主「立て看板に書いてあったでしょう？」

何が書いてあったか。

パンケーキ ねこ ビーズ ハンカチーフ

美人の店主はもう！とため息をついて、しりとりでしょう？と言う。

店主「私はこの言葉の並びで、こう言いたい。あなたはそれに合わせて、言葉を考えるのよ。しりとりと私が言ったら、あなたはリンパと言う。私はパンケーキと答えるわ。さあね、続く言葉を考えて。」

そんなこと、クロマオーは弱ってしまう。

ネイは大げさなため息をついて、道を帰ろうとしているし、

美人は美人で私が法律だし、

どうしたらいい？基本的に女性は好きだし。

クロマオー「えっと、きつね！」

ネイ「クロマオー！」

ネイは顔を真っ赤にしている。

店主「やきもちかしら。ただしりとりをしているだけよ。ありがとうね、きみ。きつねと来て、ねこ！」

クロマオー「こ……こ……何かあるかな。」

店主「早くしてったら。」

ネイは怒っている。足音けたたましく、道を一人で戻りだした。

これ以上この美人を相手にすると、ネイに対して良くない。クロマオーは大きな声でこゆびと叫び、ネイを追った。

店主「ビーズ！次は〜〜〜？」

ダメだダメだ。美人だからってあんなに法律ではいけない。

でも話していると、ちょっと良かったのは正直な所。

しかしそもそも何屋なのだ。クロマオーは頭をひねる。
後々あれが女性の可愛さを売るお店だと知ることになるのだろう。

クロマオー「ネイちゃー————ん！」

とにかく怒っている。階段をぐんぐん上って行く、ペースが速い。
道を抜けて来た時にはもう十段上の方にいた。

クロマオー達は知らないが、あそこは煩惱を捨てる店だったのだ。
実際二人はその後黙々と上っている。

後ろから見えるネイは寂しそうだった。
疲れているのか、泣いているのかもしれない。

クロマオーは掴みどころのない気持ちに戸惑った。
女性と話して、ネイが怒るなんて思わなかった。
ドキドキしているのは階段のせいなのか。

頭の中に浮かんでいる言葉は、ある。
だがそれを言うのはためられる。

何も言わぬまま、二人は十段上った。

ネイはそこで振り向いて、何事もない顔をして、あともう少しで二分の一だよと笑った。
実際は二分の一まではもうしばらくかかる。

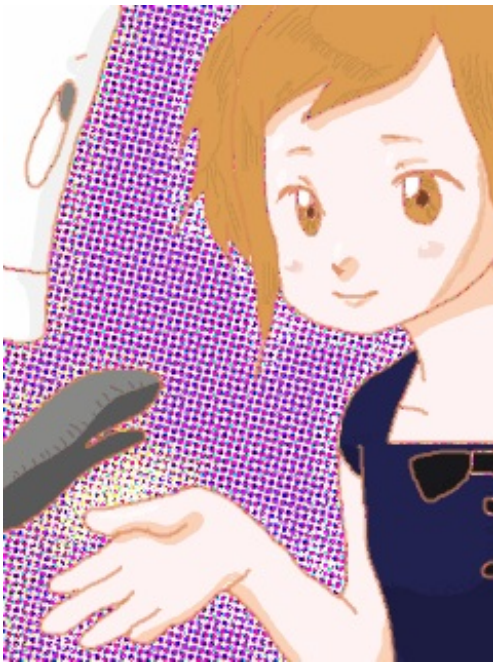
何を言ったら良いのか分からないのはネイも同じだ。

だからとりあえず、階段トークとしてありがちな、

クロマオー「もう足が痛いよ。」

ネイ「あとすこし、あとすこし。」

方向でいってみる。



クロマオー「でもネイちゃんのおかげでだいぶ楽だよ。この黒豆茶があれば元気百倍だ！」

ネイ「お茶の中では黒豆茶が一番好き。すっきりしていて香ばしくてほのかに甘い。お茶に求めること全部入ってるもの。」

クロマオー「僕も好き。一番好き。」

二人とも妙に、「一番好き」に力が入っていた。お互いそれは気付かぬふりで、今度は並んでの

ぼりだす。

やがて脇道のある、休憩出来るスペースに出た。

脇道をチラッと見るが、先ほどの一件があった為進んで行こうとは思わない。

誘い込むような看板には、

「お参りして何が出来る」

「あなたのいくすえ教えます」

完全にテラに対して喧嘩を売る内容で店を出す、占い屋のようだ。左と右、両方に脇道があるが明らかに左のこちらの方があやしい。クロマオーは鼻にしわをつくった。

クロマオー「いくら、とるんだらうね。」

ネイ「こういうのって結構するでしょ。興味あるの？」

クロマオー「ないよ。アヤシイじゃないか。」

ネイ「そうだよ。しかも未来が決まっているみたいな言い方されるのいやだわ。」

クロマオー「毎日頑張った分だけ、未来がある。そんな風に考えたいよね。」

ドゴー————ン！！！！

突然の大きな音に、肩をそびやかす。

と、何か左の脇道から飛んできた。背中に可哀想にへしゃげたふすまが付いた金髪の若い男だ。そのまま右の脇道まで飛んで行った。どこまで飛ぶか、飛距離を測りたい。

「信じてたのに！」

そこに占い屋から出てきたらしい、仙人のような老人。

もじゃもじゃのひげと、ひたいにあるイボが特徴だ。

老人「わし、信じていたのに。お前が『愛してる、次の一生でも必ず探し出して、永遠に一緒だ』と言うから体を捧げたのに！七十年生きていて初めてだったのに！」

そこまで守ったなら守り通して欲しかった。ネイは咄嗟にクロマオーの耳をふさいだ。

老人「わし、愛してたのに！ずっと一緒にいたかったのに！」

若い男「二丁目のしんぱちおじいと、暮らすんだ俺は。お前なんて若いのに、色気も何もねえよ！」

老人「三つしか違わないのに！あっちが総入れ歯だからって！」

若い男「うるせえよ。じゃあな。気が向いたらまた抱いてやるよ。」

老人「そんな……おぬしはバカじゃ！」

若い男は背を向けて、片手はポケットに、軽く手をあげた。
老人は目を潤ませて、見送っている。

ネイはようやく、クロマオーの耳から手を離した。

世界は驚くほど広い、と思った。

ネイ「……びっくりしたね。」

クロマオー「大人ってすごいね。」

老人は寝転がって、泣いている。うずくまると各所がコンドロイチンの理由で痛いからなのか、ビスビス鼻を鳴らす音がする。

~~~~~

放っておくのは、介護的な意味でいけない気がする。  
声をかけるべきだ。

## しんぱちおじい

老人は、海よりも深い愛を捧げていたと語った。（寝転がったままで）  
クロマオーはその間、床ずれが起きないように、何度か体を動かしてやった。  
ネイは、疲れたような目で二人を遠くから見ていた。



クロマオー「分かりました。そんなにジュンジュンのことを好きだったんですね。」  
老人「そうじゃ。たばこを吸う時カッコつけて足を組むのがキュートだった。」  
クロマオー「さっきお聞きしました。三回目です。」

クロマオーは老人を裏返した。くぐもった声で続ける。

老人「ジュンジュンは何で行ってしまったのじゃろう。わしほど愛せるオトコはいない。」  
クロマオー「好きな人が出来たみたいでしたね。」  
老人「しんぱちなんて、ゴミだめで生きているような奴が何が良い？変なメカをつくって、何をする気だか薄気味悪いわ！」  
クロマオー「想像するに、ジュンジュンはマニアックですからね。」  
老人「ど変態じゃよ。でも牧師のような所もある。」

ひっくり返した為に、老人が頬を染めたのを、クロマオーは見てしまった。  
しんぱちとこの老人を両方、美女と想像してやり過ごす。

老人「大体、しんぱちには妻がいる。五十年連れ添った妻だ。シロバンチョーがせっせとしんぱちの所に通うのは、あの嫁に会いたいからだって話があるくらいだ。大した女だよ。」

聞きなれた名前が出てきてびっくりする。

クロマオー「しんぱちおじいの奥さんが好きなの？シロさんは。」

老人「年上の女性には弱いのだ。あいつは寂しい思いをして育ったから。」

クロマオー「ふーん。」

老人「ところで、お前マゾクじゃろ。汚いから触らないでくれ。」

老人は何とか起き上ろうとしたので、クロマオーはそれでも支えてやった。

すこしばつが悪そうに、泣きはらした目で、睨んでくる。この元気があれば大丈夫。

ネイは勇気を出して一步一步近づいてきた。どこか遠慮勝ちである。男同士の世界に入りづらいのだろう。

クロマオーだって入りづらい。

老人は占い屋に戻ろうと背を向けた、かに、見えた。

自然ネイと、嵐が去った喜びに手を取り合わんとしていた時、老人はよちよちとこちらに戻り、宣言した。

「お前らを占う！」と。

## 唐辛子占い

---

お年寄りを大事にしないといけない観点から、クロマオーは脇道に入っていった。

潰れそうなかやぶき屋根。

老人はここで占いをしているらしい。ネイもあとからついてきた。

老人「ワシはごろちゃんと言う。この階段で唯一認可されている占い師だ。唐辛子占いというものをするが、この的中率は恐ろしく高い。もし知りたいことがあるなら、何でも聞くがいい。普段は三万かかるが、特別に無料で占ってやろう。」

クロマオー「自分のことは占わなかったんですか？」

ごろちゃん「おぬしはジュンジュンのことが言いたいんじゃない？ジュンジュンのことはワシは出会った時から分かっておった。いつか別れがあると。だが、止められなかったんじゃない。若いジュンジュンの体が……。」

クロマオー「いやあの、いいです。その話はよしましょう。」

うっかりすると危険な方向に話がいく。クロマオーはさえぎって、二つ浮かんだうちの前から知りたかったことの方を言った。

クロマオー「父はどこにいますか？」

ごろちゃんはこぼれ落ちそうにざるに乗った唐辛子をひとつ摘み、何か聞いたことのない言葉で唱え始めた。

そしてうなりながら背中を見せたり、首筋を見せるような不可思議な動きのあと、唐辛子を食した。

ごろちゃん「甘い。細長いツルが舌にまとわりつくように、しつこい甘味がある。ワシがこう感じるということは神のお言葉。ワシはそう思う。」

試しにクロマオーはざるの唐辛子を食べてみたが、手のひらを握りしめるくらい辛い。だがごろちゃんは平常である。

ごろちゃん「バカなことをする。ジュンジュンみたいだな。お前の父は、南にいる。時折誰かが来て話をするが、ずっと一人ぼっちだ。しかしまだもうしばらく、お前と会うことはないだろう。父のことを救う好機には、ダイダイがいるだろう。お前はそれに備えダイダイを大切にせねばならん。お前はまたジュンジュンに会って、ワシのことを思いやるように言わねばならん。それが宿命であり、お前の人生を動かす。ワシはそう思う。」

クロマオー「途中から願望入ってませんか？」

ごろちゃん「全ては自然である。宿命とは、お前の皮の下に流れる血管である。」

クロマオー「誤魔化しましたか？」

ネイは頬杖をついて聞いていたけれど、そこで初めて口を開いた。

ネイ「南にはサリバン収容所がある。いるかもしれないね。」

ごろちゃん「南には、しんぱちの家もある。ジュンジュンもいるかもしれないぞ。」

クロマオー「ええ、分かりましたよ。何かで見た際には、ジュンジュンにごろちゃんを大事にするよう強く訴えかけます、瞳で。」

ネイ「そうしよう。」

ごろちゃん「ワシも老い先短い。頼んだからな。」

瞳で、分かった風に装って、クロマオーとネイの二人はその場をあとにした。

ごろちゃんは意外に、玄関まで見送ってくれた。

二人になり、クロマオーの頭には先ほど、口には出せなかった質問がぐるぐると回っていた。

『マゾクとヒトは一緒にはなれますか？』

それは、大きな意味がある。躊躇いが強すぎて口には出せない。

見上げると階段の先が見える所まで来ていた。

のぼれば達成できることならば、頑張ることもできる。

マゾクとヒトはどうだろうか。

横を見れば、ネイは苦しそうだ。ネイも、苦しそうだ。

クロマオーはひょいっとネイを抱えあげた。

ネイ「え、なに？」

クロマオー「マゾクリキシャになろうと思って。」

抱えるのはそれほど楽なことではないが。

頑張れば、のぼりきれぬならのぼりたかった。

夕日が落ち、

ダイダイ色にネイが染まる。

クロマオーはガラス瓶のように口づけたいお姫様を、大切に大切に運びあげた。

四話につづく。